

## 付録 E ボース凝縮体の波動関数

### E.1 グロス・ピタエフスキー方程式

外部ポテンシャル  $V_{\text{trap}}(\mathbf{r})$  に閉じ込められた  $N$  個のボース粒子の系を考える。粒子数密度は十分低く、二体衝突のみ起こるとする。つまり、粒子間相互作用として、二粒子間ポテンシャル  $U(\mathbf{r}'-\mathbf{r})$  のみを考える。また系の温度  $T$  は十分低く、熱的ド・ブロイ波長（ド・ブロイ波長の平均的長さ）  $\lambda_{\text{dB}} \equiv h/\sqrt{2\pi mk_{\text{B}}T}$  は、二粒子間ポテンシャル  $U(\mathbf{r}'-\mathbf{r})$  の到達距離に比べて十分長いとする。このとき、S 波散乱のみを考えればよく（付録 D.4 参照）、ポテンシャルは実効的にデルタ関数で近似できる：

$$U(\mathbf{r}'-\mathbf{r}) = U_0 \delta(\mathbf{r}'-\mathbf{r}). \quad (\text{E.1})$$

付録 D の式 (D.42) より、 $U_0$  は S 波散乱の散乱長  $a$  を用いて、

$$U_0 = \int d\mathbf{r}' U(\mathbf{r}'-\mathbf{r}) = \frac{4\pi\hbar^2 a}{m} \quad (\text{E.2})$$

と表される（ $m$  は粒子の質量）。

ポテンシャル  $U(\mathbf{r}'-\mathbf{r})$  が、式 (E.1) のように近似できるとき、場の演算子  $\hat{\Psi}(\mathbf{r}, t)$  の時間発展を記述するハイゼンベルグの運動方程式は、付録 C の式 (C.30) で与えられる：

$$i\hbar \frac{\partial}{\partial t} \hat{\Psi}(\mathbf{r}, t) = \left[ -\frac{\hbar^2}{2m} \nabla^2 + V_{\text{trap}}(\mathbf{r}) + U_0 \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{r}, t) \hat{\Psi}(\mathbf{r}, t) \right] \hat{\Psi}(\mathbf{r}, t). \quad (\text{E.3})$$

今、この系がボース・アインシュタイン凝縮を起こしているとする。このとき、ボゴリューホフによる平均場理論（mean-field theory）[23]では、場の演算子を以下のように分解する：

$$\hat{\Psi}(\mathbf{r}, t) = \Phi(\mathbf{r}, t) + \hat{\Psi}'(\mathbf{r}, t) \quad (\text{E.4})$$

ただし、

$$\Phi(\mathbf{r}, t) = \langle \hat{\Psi}(\mathbf{r}, t) \rangle. \quad (\text{E.5})$$

$\Phi(\mathbf{r}, t)$  は c 数の関数で、**ボース凝縮体の波動関数** または **オーダーパラメーター** と呼ばれる。 $\hat{\Psi}'(\mathbf{r}, t)$  は量子的または熱的揺らぎを表す演算子で、定義より  $\langle \hat{\Psi}'(\mathbf{r}, t) \rangle = 0$  である。式 (E.4) を式 (E.3) に代入して期待値をとると、 $\Phi(\mathbf{r}, t)$  に関する波動方程式が得られる：

$$i\hbar \frac{\partial}{\partial t} \Phi(\mathbf{r}, t) = \left[ -\frac{\hbar^2}{2m} \nabla^2 + V_{\text{trap}}(\mathbf{r}) + U_0 |\Phi(\mathbf{r}, t)|^2 \right] \Phi(\mathbf{r}, t) . \quad (\text{E.6})$$

これは**非線型シュレーディンガー方程式**、または**グロス・ピタエフスキー方程式**と呼ばれる [24,25]。二粒子間相互作用による項  $U_0 |\Phi(\mathbf{r}, t)|^2$  は**平均場エネルギー**と呼ばれる。この項がなければ、式 (E.6) は、まさしく一粒子のシュレーディンガー方程式に帰着する。

式 (E.6) の解として、定常状態  $\Phi(\mathbf{r}, t) = \exp(-i\mu t/\hbar)\Phi(\mathbf{r})$  を考える。これを式 (E.6) に代入すると、時間に依存しないグロス・ピタエフスキー方程式が得られる：

$$\left[ -\frac{\hbar^2}{2m} \nabla^2 + V_{\text{trap}}(\mathbf{r}) + U_0 |\Phi(\mathbf{r})|^2 \right] \Phi(\mathbf{r}) = \mu \Phi(\mathbf{r}) . \quad (\text{E.7})$$

E. 3 で示すように、 $\mu$  はボース凝縮体の（全エネルギーではなく）化学ポテンシャルである。付録 C の式 (C.18) より、時刻  $t$ 、位置  $\mathbf{r}$  での粒子数密度  $n(\mathbf{r})$  は、場の演算子の積の期待値  $\langle \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{r}) \hat{\Psi}(\mathbf{r}) \rangle$  で表される。これを計算すると、

$$\begin{aligned} n(\mathbf{r}) &= \langle \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{r}) \hat{\Psi}(\mathbf{r}) \rangle \\ &= \langle (\Phi^*(\mathbf{r}) + \hat{\Psi}'^\dagger(\mathbf{r})) (\Phi(\mathbf{r}) + \hat{\Psi}'(\mathbf{r})) \rangle \\ &= |\Phi(\mathbf{r})|^2 + \langle \hat{\Psi}'^\dagger(\mathbf{r}) \hat{\Psi}'(\mathbf{r}) \rangle \end{aligned} \quad (\text{E.8})$$

となる。 $|\Phi(\mathbf{r})|^2$  はボース凝縮体の密度分布、 $\langle \hat{\Psi}'^\dagger(\mathbf{r}) \hat{\Psi}'(\mathbf{r}) \rangle$  はボース凝縮していない成分（**ノーマル成分**と呼ぶ）の密度分布を表す。今、特に系の温度がゼロで、全ての粒子がボース凝縮しているとする。このとき、ボース凝縮体の密度分布  $|\Phi(\mathbf{r})|^2$  を全空間にわたって積分したものは、全粒子数  $N$  になる（ $\Phi(\mathbf{r})$  に関する規格化条件）：

$$\int |\Phi(\mathbf{r})|^2 d\mathbf{r} = N . \quad (\text{E.9})$$

## E. 2 トーマス・フェルミ近似

今後は散乱長  $a$  が正、つまり  $U_0 > 0$  の場合のみ考えることにする。粒子数  $N$  が十分大きいとき、平均場エネルギーが運動エネルギーに比べてずっと大きくなる。このとき時間に依存しないグロス・ピタエフスキー方程式 (E.7) から、運動エネルギーの項を無視する近似 (トーマス・フェルミ近似) ができる：

$$\left[ V_{\text{trap}}(\mathbf{r}) + U_0 |\Phi(\mathbf{r})|^2 \right] \Phi(\mathbf{r}) = \mu \Phi(\mathbf{r}) . \quad (\text{E.10})$$

式 (E.10) は、全ての  $\mathbf{r}$  において満足されなければならないので、 $\Phi(\mathbf{r})$  がゼロでない  $\mathbf{r}$  については、

$$V_{\text{trap}}(\mathbf{r}) + U_0 |\Phi(\mathbf{r})|^2 = \mu \quad (\text{E.11})$$

が成立する。よって、ボース凝縮体の密度分布  $n(\mathbf{r})$  は、

$$n(\mathbf{r}) = |\Phi(\mathbf{r})|^2 = \max \left[ \frac{\mu - V_{\text{trap}}(\mathbf{r})}{U_0}, 0 \right] \quad (\text{E.12})$$

と表される。

今、具体的に  $V_{\text{trap}}(\mathbf{r})$  として、非等方的三次元調和ポテンシャルを考える：

$$V_{\text{trap}}(\mathbf{r}) = \frac{1}{2} m (\omega_x^2 x^2 + \omega_y^2 y^2 + \omega_z^2 z^2) . \quad (\text{E.13})$$

$|\Phi(\mathbf{r})|^2$  の規格化条件 (E.9) と、 $U_0$  の具体形 (E.2) より、 $\mu$  は以下のように表せる：

$$\mu = \frac{1}{2} \hbar \bar{\omega} \left( 15 N a \sqrt{\frac{m \bar{\omega}}{\hbar}} \right)^{2/5} = 1.48 \left( N a \hbar^2 \bar{\omega}^3 m^{1/2} \right)^{2/5} . \quad (\text{E.14})$$

ここで、

$$\bar{\omega} \equiv (\omega_x \omega_y \omega_z)^{1/3} \quad (\text{E.15})$$

と定義した ( $\bar{\omega}$  は  $\omega_x, \omega_y, \omega_z$  の幾何平均).

式 (E.13) ~ (E.15) より, ピーク密度  $n_0 \equiv n(\mathbf{0})$ 、およびボース凝縮体の ( $n(\mathbf{r}) \neq 0$  である領域の)  $x, y, z$  方向の半幅  $d_i$  ( $i = x, y, z$ ) は,

$$n_0 = \frac{\mu}{U_0} = 0.118 \left( N_0 m^3 \bar{\omega}^3 / \hbar^3 a^{3/2} \right)^{2/5}. \quad (\text{E.16})$$

$$d_i = \sqrt{\frac{2\mu}{m\omega_i^2}} = \frac{1.72}{\omega_i} \left( Na\hbar^2 \bar{\omega}^3 / m^2 \right)^{1/5} \quad (\text{E.17})$$

と表せる.

### E.3 ボース凝縮体のエネルギー

ボース粒子系の全エネルギーを表すハミルトニアンは、付録 C の (C.23) より、

$$\hat{H} = \int d\mathbf{r} \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{r}) \left[ -\frac{\hbar^2}{2m} \nabla^2 + V_{\text{trap}}(\mathbf{r}) \right] \hat{\Psi}(\mathbf{r}) + \frac{1}{2} \iint d\mathbf{r} d\mathbf{r}' \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{r}) \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{r}') U(\mathbf{r}-\mathbf{r}') \hat{\Psi}(\mathbf{r}) \hat{\Psi}(\mathbf{r}') \quad (\text{E.18})$$

で与えられる. これに、 $\hat{\Psi}(\mathbf{r}) = \Phi(\mathbf{r}) + \hat{\Psi}'(\mathbf{r})$  (式 (E.1))、 $U(\mathbf{r}'-\mathbf{r}) = U_0 \delta(\mathbf{r}'-\mathbf{r})$  (式 (E.4)) を代入し、期待値をとれば、ボース凝縮体の全エネルギー  $E$  が求まる:

$$E = \langle \hat{H} \rangle = \int d\mathbf{r} \left[ \frac{\hbar^2}{2m} |\nabla \Phi(\mathbf{r})|^2 + V_{\text{trap}}(\mathbf{r}) |\Phi(\mathbf{r})|^2 + \frac{U_0}{2} |\Phi(\mathbf{r})|^4 \right]. \quad (\text{E.19})$$

このように、全エネルギー  $E$  は、運動エネルギー  $E_{\text{kin}}$ 、ポテンシャルエネルギー  $E_{\text{pot}}$ 、相互作用 (平均場) エネルギー  $E_{\text{int}}$  の三つの寄与からなる:

$$E = E_{\text{kin}} + E_{\text{pot}} + E_{\text{int}} \quad (\text{E.20})$$

ただし、

$$E_{\text{kin}} \equiv \int \frac{\hbar^2}{2m} |\nabla \Phi(\mathbf{r})|^2 d\mathbf{r} \quad (\text{E.21})$$

$$E_{\text{pot}} \equiv \int V_{\text{trap}}(\mathbf{r}) |\Phi(\mathbf{r})|^2 d\mathbf{r} \quad (\text{E.22})$$

$$E_{\text{int}} \equiv \int \frac{U_0}{2} |\Phi(\mathbf{r})|^4 d\mathbf{r} . \quad (\text{E.23})$$

ビリアル定理\*より、 $E_{\text{kin}}, E_{\text{pot}}, E_{\text{int}}$ の間には以下の関係がある：

$$2E_{\text{kin}} - 2E_{\text{pot}} + 3E_{\text{int}} = 0 . \quad (\text{E.24})$$

また、時間に依存しないグロス・ピタエフスキー方程式 (E.9) の両辺に左から  $\Phi^*(\mathbf{r})$  をかけ、全空間にわたって積分すると、

$$\int d\mathbf{r} \Phi^*(\mathbf{r}) \left[ -\frac{\hbar^2}{2m} \nabla^2 + V_{\text{trap}}(\mathbf{r}) + U_0 |\Phi(\mathbf{r})|^2 \right] \Phi(\mathbf{r}, t) = \mu \int |\Phi(\mathbf{r})|^2 d\mathbf{r}$$

$$\Leftrightarrow E_{\text{kin}} + E_{\text{pot}} + 2E_{\text{int}} = \mu N \quad (\text{E.25})$$

このように、 $E_{\text{kin}}, E_{\text{pot}}, E_{\text{int}}$ 間の関係式が得られる。

今、トーマス・フェルミ近似が成り立つとすると、運動エネルギーの項を無視できるので、式 (E.24)、(E.25) から  $E_{\text{pot}}, E_{\text{int}}$ に関する連立方程式が得られ、 $E_{\text{pot}}, E_{\text{int}}$ が求まる：

$$\begin{cases} -2E_{\text{pot}} + 3E_{\text{int}} = 0 \\ E_{\text{pot}} + 2E_{\text{int}} = \mu N \end{cases} \Leftrightarrow \begin{cases} E_{\text{pot}} = \frac{3}{7} \mu N \\ E_{\text{int}} = \frac{2}{7} \mu N \end{cases} \quad (\text{E.26})$$

よって、全エネルギー  $E$  は

---

\*  $x$  方向にスケール変換した波動関数  $\Phi(x, y, z) \rightarrow (1+\nu)^{1/2} \Phi[(1+\nu)x, y, z]$  を式 (E.19) に代入し、 $\nu$  の一次で  $\langle \hat{H} \rangle$  の変分がゼロとおくと、関係式  $(E_{\text{kin}})_x - (E_{\text{pot}})_x + E_{\text{int}}/2 = 0$  が得られる。 $y, z$  方向に関しても同様の関係式が得られ、それらの和をとると、式 (E.24) が得られる。

$$E = E_{\text{pot}} + E_{\text{int}} = \frac{5}{7} \mu N \quad (\text{E.27})$$

となる. 更に  $\mu$  の具体形 (E.14) を代入すると、

$$E = \frac{5}{7} \cdot \frac{1}{2} \hbar \bar{\omega} \left( 15aN \sqrt{\frac{m\bar{\omega}}{\hbar}} \right)^{2/5} N = 1.06 (a\hbar^2 \bar{\omega}^3 m^{1/2})^{2/5} N^{7/5} . \quad (\text{E.28})$$

と表せる. この式から、化学ポテンシャル  $\frac{dE}{dN}$  は、確かに  $\mu$  にであることがわかる:

$$\frac{dE}{dN} = \frac{1}{2} \hbar \bar{\omega} \left( 15a \sqrt{\frac{m\bar{\omega}}{\hbar}} \right)^{2/5} N^{2/5} = \mu . \quad (\text{E.29})$$

トーマス・フェルミ近似におけるボース凝縮体の諸パラメーターを、粒子数  $N$  に対する依存性に着目してまとめると、表 E.1 のようになる.

パラメーター	長さ	体積	密度	エネルギー	一粒子当たりのエネルギー
変数	$d$	$V \propto d^3$	$n \propto N/V$	$E \propto n^2 V$	$\mu \propto E/N$
$N$ 依存性	$N^{1/5}$	$N^{3/5}$	$N^{2/5}$	$N^{7/5}$	$N^{2/5}$

表 E.1 ボース凝縮体の諸パラメーターの粒子数  $N$  依存性

#### E. 4 ボース凝縮体の密度分布の時間発展

ここでは、参考論文[48]に従って、トーマス・フェルミ近似が成り立つ場合における、ボース凝縮体の波動関数の時間発展について考える. 外部ポテンシャルとして、時間に依存する非等方的三次元調和ポテンシャルを考える:

$$V_{\text{trap}}(\mathbf{r}, t) = \frac{1}{2} m \left[ \omega_x^2(t) x^2 + \omega_y^2(t) y^2 + \omega_z^2(t) z^2 \right] . \quad (\text{E.30})$$

今、ボース凝縮体を、粒子数密度  $n(\mathbf{r}, t) = |\Phi(\mathbf{r}, t)|^2$  をもった古典的な気体と考える. グロス・ピタエフスキー方程式 (E.6) より、位置  $\mathbf{r}$  にある粒子は、実効的に、ポテンシャルエネルギー「 $V_{\text{trap}}(\mathbf{r}, t) + U_0 |\Phi(\mathbf{r}, t)|^2$ 」を持っているので、以下の力を受ける:

$$\mathbf{F}(\mathbf{r}, t) = -\nabla(V_{\text{trap}}(\mathbf{r}, t) + U_0 n(\mathbf{r}, t)) \quad (\text{E.31})$$

今、時刻  $t=0$  では、ボース凝縮体は定常状態にあるとする。このとき、 $\mathbf{F}(\mathbf{r}, 0) = \mathbf{0}$  であるので、

$$-\nabla V_{\text{trap}}(\mathbf{r}, 0) = U_0 \nabla n(\mathbf{r}, 0) \quad (\text{E.32})$$

が成立する。これは外部ポテンシャルからの力と、平均場（斥力）相互作用による力が釣り合っている状況を表している。

ここで、一つの仮定をする。時刻  $t=0$  に、任意の位置  $\mathbf{R}(0) = (x_0, y_0, z_0)$  にあった粒子は、後の時刻に、

$$\mathbf{R}(t) = (\lambda_x(t)x_0, \lambda_y(t)y_0, \lambda_z(t)z_0) \quad (\lambda_x(0) = \lambda_y(0) = \lambda_z(0) = 1) \quad (\text{E.33})$$

へ移動するとする。つまり単にスケールのみが変わるとする。このとき、一般に時刻  $t$ 、位置  $\mathbf{r} = (x, y, z)$  における密度分布は、

$$\begin{aligned} n(\mathbf{r}, t) &= \frac{1}{\lambda_x(t)\lambda_y(t)\lambda_z(t)} n\left[\left(\frac{x}{\lambda_x(t)}, \frac{y}{\lambda_y(t)}, \frac{z}{\lambda_z(t)}\right), 0\right] \\ &= \frac{\mu - \frac{1}{2}m\left\{\left(\frac{\omega_x(0)x}{\lambda_x(t)}\right)^2 + \left(\frac{\omega_y(0)y}{\lambda_y(t)}\right)^2 + \left(\frac{\omega_z(0)z}{\lambda_z(t)}\right)^2\right\}}{U_0 \lambda_x(t)\lambda_y(t)\lambda_z(t)} \end{aligned} \quad (\text{E.34})$$

と表せる。

一方、初期位置  $\mathbf{R}(0) = (x_0, y_0, z_0)$  にあった粒子の運動の軌跡  $\mathbf{R}(t)$  は、ニュートンの運動方程式に従わなければならない：

$$m \frac{d^2 \mathbf{R}(t)}{dt^2} = \mathbf{F}(\mathbf{R}(t), t). \quad (\text{E.35})$$

式 (E.33) で仮定した  $\mathbf{R}(t)$  より、左辺を計算すると、

$$m \frac{d^2 \mathbf{R}(t)}{dt^2} = m \left( \frac{d^2 \lambda_x(t)}{dt^2} x_0, \frac{d^2 \lambda_y(t)}{dt^2} y_0, \frac{d^2 \lambda_z(t)}{dt^2} z_0 \right). \quad (\text{E.36})$$

また、式 (E.32) ~ (E.34) を用いて右辺を計算すると、

$$\begin{aligned} \mathbf{F}(\mathbf{R}(t), t) &= -\nabla (V_{\text{trap}}(\mathbf{r}, t) + U_0 n(\mathbf{r}, t)) \Big|_{\mathbf{r}=\mathbf{R}(t)} \\ &= -\nabla V_{\text{trap}}(\mathbf{r}, t) \Big|_{\mathbf{r}=\mathbf{R}(t)} - \frac{1}{\lambda_x(t)\lambda_y(t)\lambda_z(t)} \nabla U_0 n \left[ \left( \frac{x}{\lambda_x(t)}, \frac{y}{\lambda_y(t)}, \frac{z}{\lambda_z(t)} \right), 0 \right] \Big|_{\mathbf{r}=\mathbf{R}(t)} \\ &= -\nabla V_{\text{trap}}(\mathbf{r}, t) \Big|_{\mathbf{r}=\mathbf{R}(t)} + \frac{1}{\lambda_x(t)\lambda_y(t)\lambda_z(t)} \nabla V_{\text{trap}} \left[ \left( \frac{x}{\lambda_x(t)}, \frac{y}{\lambda_y(t)}, \frac{z}{\lambda_z(t)} \right), 0 \right] \Big|_{\mathbf{r}=\mathbf{R}(t)} \\ &= -m \left( \omega_x^2(t)x, \omega_y^2(t)y, \omega_z^2(t)z \right) \Big|_{\mathbf{r}=\mathbf{R}(t)} \\ &\quad + \frac{m}{\lambda_x(t)\lambda_y(t)\lambda_z(t)} \left( \frac{\omega_x^2(0)x}{\lambda_x^2(t)}, \frac{\omega_y^2(0)y}{\lambda_y^2(t)}, \frac{\omega_z^2(0)z}{\lambda_z^2(t)} \right) \Big|_{\mathbf{r}=\mathbf{R}(t)} \\ &= -m \left( \omega_x^2(t)\lambda_x(t)x_0, \omega_y^2(t)\lambda_y(t)y_0, \omega_z^2(t)\lambda_z(t)z_0 \right) \\ &\quad + \frac{m}{\lambda_x(t)\lambda_y(t)\lambda_z(t)} \left( \frac{\omega_x^2(0)x_0}{\lambda_x(t)}, \frac{\omega_y^2(0)y_0}{\lambda_y(t)}, \frac{\omega_z^2(0)z_0}{\lambda_z(t)} \right). \end{aligned} \quad (\text{E.37})$$

式 (E.36) と (E.37) の各成分は等しくなければならないので、

$$\frac{d^2 \lambda_i(t)}{dt^2} = \frac{\omega_i^2(0)}{\lambda_i \lambda_x \lambda_y \lambda_z} - \omega_i^2(t) \lambda_i \quad (i = x, y, z) \quad (\text{E.38})$$

が成立する。この式は、粒子の初期位置  $\mathbf{R}(0)$  に依らないので、最初に仮定した式 (E.33) が、自己無撞着な解になっていたことがわかる。式 (E.33) は、外部ポテンシャルが調和型のみ成立する。以上の結果は、古典的な気体のモデルより導かれたが、同じ結果が、時間に依存するグロス・ピタエフスキー方程式より導かれることが知られている [48]。

軸対称ポテンシャル  $\omega_x(t) = \omega_y(t) \equiv \omega_\rho(t) \gg \omega_z(t)$  の場合、式 (E.38) は、



$$\begin{cases} \frac{d^2 \lambda_\rho(t)}{dt^2} = \frac{\omega_\rho^2(0)}{\lambda_\rho^3 \lambda_z} - \omega_\rho^2(t) \lambda_\rho \\ \frac{d^2 \lambda_z(t)}{dt^2} = \frac{\omega_z^2(0)}{\lambda_\rho^2 \lambda_z^2} - \omega_z^2(t) \lambda_z \end{cases} \quad (\text{E.39})$$

となる．ここで、 $\lambda_\rho(t) \equiv \lambda_x(t) = \lambda_y(t)$  とした．特に、時刻  $t=0$  で、瞬間的に外部ポテンシャルを切った場合、つまり

$$\omega_\rho(t) = \begin{cases} \omega_\rho & (t=0) \\ 0 & (t>0) \end{cases}, \quad \omega_z(t) = \begin{cases} \omega_z & (t=0) \\ 0 & (t>0) \end{cases}$$

のとき、式 (E.39) は、無次元の時間変数  $\tau \equiv \omega_\rho t$  と、パラメーター  $\varepsilon \equiv \omega_z / \omega_\rho \ll 1$  を用いて、

$$\begin{cases} \frac{d^2 \lambda_\rho(\tau)}{d\tau^2} = \frac{1}{\lambda_\rho^3 \lambda_z} \\ \frac{d^2 \lambda_z(\tau)}{d\tau^2} = \frac{\varepsilon^2}{\lambda_\rho^2 \lambda_z^2} \end{cases} \quad (\text{E.40})$$

と表せる．初期条件は  $\lambda_\rho(0) = \lambda_z(0) = 1$  および  $\dot{\lambda}_\rho(0) = \dot{\lambda}_z(0) = 0$  である．この連立微分方程式を、 $\varepsilon$  を展開パラメーターとする逐次近似法で解く． $\lambda_\rho(\tau)$  に関しては  $\varepsilon$  の 0 次、 $\lambda_z(\tau)$  に関しては  $\varepsilon$  の 2 次までとる近似では、

$$\begin{cases} \lambda_\rho(\tau) = \sqrt{1 + \tau^2} \\ \lambda_z(\tau) = 1 + \varepsilon^2 \left[ \tau \arctan \tau - \ln \sqrt{1 + \tau^2} \right] \end{cases} \quad (\text{E.41})$$

となる．

時刻  $t$  におけるボース凝縮体の  $\rho$  方向 ( $x, y$  方向) および  $z$  方向の半幅  $d_\rho(t)$ ,  $d_z(t)$  は、初期の半幅 (式 (E.17)) に、式 (E.41) の因子をそれぞれかければ得られる：

$$\begin{aligned}
d_\rho(t) &= \lambda_\rho(t) \sqrt{\frac{2\mu}{m\omega_\rho^2}} \\
d_z(t) &= \lambda_z(t) \sqrt{\frac{2\mu}{m\omega_z^2}} .
\end{aligned} \tag{E.42}$$

よって、時刻  $t$  でのボース凝縮体のアスペクト比  $\varepsilon(t) \equiv d_\rho(t)/d_z(t)$  は、

$$\varepsilon(t) = \frac{d_\rho(t)}{d_z(t)} = \varepsilon(0) \frac{\lambda_\rho(t)}{\lambda_z(t)} \tag{E.43}$$

ただし、

$$\varepsilon(0) = \varepsilon = \frac{\omega_z}{\omega_\rho} . \tag{E.44}$$

ボース凝縮体の  $\rho$  方向および  $z$  方向の拡散の速さ（速度分布の半幅） $v_\rho(t)$ ,  $v_z(t)$  は、

$$\begin{aligned}
v_\rho(t) &= \frac{d}{dt} d_\rho(t) = \frac{d}{dt} \lambda_\rho(t) \sqrt{\frac{2\mu}{m\omega_\rho^2}} = v_{\rho,\infty} \cdot \frac{\omega_\rho t}{\sqrt{1 + \omega_\rho^2 t^2}} \\
v_z(t) &= \frac{d}{dt} d_z(t) = \frac{d}{dt} \lambda_z(t) \sqrt{\frac{2\mu}{m\omega_z^2}} = v_{z,\infty} \cdot \frac{2}{\pi} \arctan \omega_\rho t
\end{aligned} \tag{E.45}$$

ここで、 $v_{\rho,\infty}, v_{z,\infty}$  は  $\rho$  方向、 $z$  方向の漸近速度で、

$$\begin{aligned}
v_{\rho,\infty} &= \omega_\rho d_\rho(0) \\
v_{z,\infty} &= \frac{\pi}{2} \omega_\rho \varepsilon^2 d_z(0)
\end{aligned} \tag{E.46}$$

と表される． $\rho$  方向の漸近速度を用いて、形式的に運動エネルギーを計算してみると、化学ポテンシャル  $\mu$  になる：

$$\frac{1}{2} m v_{\rho,\infty}^2 = \frac{1}{2} m \omega_\rho^2 d_\rho^2(0) = \mu . \tag{E.47}$$

このことは、ボース凝縮体のエネルギー  $E = 5\mu/7$  (1粒子当たり) が、主に  $\rho$  方向の運動エネルギーに変換されることを意味する。

漸近速度の比  $v_{\rho,\infty}/v_{z,\infty}$  は、アスペクト比  $\varepsilon(t)$  の漸近値と一致する：

$$\frac{v_{\rho,\infty}}{v_{z,\infty}} = \frac{2}{\pi\varepsilon} = \lim_{t \rightarrow \infty} \varepsilon(t) . \quad (\text{E.48})$$

### E.5 3次元調和ポテンシャル中の理想ボース凝縮体

ここでは、3次元調和ポテンシャル中の理想ボース凝縮体、つまり粒子間相互作用のないボース凝縮体の波動関数を考える。時間に依存しないグロス・ピタエフスキー方程式 (E.7) より、相互作用の項を除くと、

$$\left[ -\frac{\hbar^2}{2m} \nabla^2 + \frac{1}{2} m(\omega_x^2 x^2 + \omega_y^2 y^2 + \omega_z^2 z^2) \right] \Phi(\mathbf{r}) = \mu \Phi(\mathbf{r}) . \quad (\text{E.49})$$

となり、一粒子のシュレーディンガー方程式に帰着する。ただし、 $\Phi(\mathbf{r})$  の規格化条件は、

$$\int |\Phi(\mathbf{r})|^2 d\mathbf{r} = N \quad (\text{E.50})$$

である。調和振動子のシュレーディンガー方程式 (E.49) の解はよく知られており、粒子数密度分布  $n(\mathbf{r}) = |\Phi(\mathbf{r})|^2$  は、以下のガウシアン型になる：

$$n(\mathbf{r}) = \frac{N}{(2\pi)^{3/2} \sigma_x \sigma_y \sigma_z} \exp \left[ -\left( \frac{x^2}{2\sigma_x^2} + \frac{y^2}{2\sigma_y^2} + \frac{z^2}{2\sigma_z^2} \right) \right] . \quad (\text{E.51})$$

ここで、

$$\sigma_i = \sqrt{\frac{\hbar}{2m\omega_i}} \quad (\text{E.52})$$

は、密度分布の各方向 ( $i = x, y, z$ ) の rms (root mean square) 幅である。速度分布  $\tilde{n}(\mathbf{v})$  も、同様にガウシアン型になる：

$$\tilde{n}(\mathbf{v}) = \frac{N}{(2\pi)^{3/2} \sigma_{v_x} \sigma_{v_y} \sigma_{v_z}} \exp \left[ - \left( \frac{v_x^2}{2\sigma_{v_x}^2} + \frac{v_y^2}{2\sigma_{v_y}^2} + \frac{v_z^2}{2\sigma_{v_z}^2} \right) \right] \quad (\text{E.53})$$

ここで

$$\sigma_{v_i} = \sqrt{\frac{\hbar \omega_i}{2m}} \quad (\text{E.54})$$

は、各方向の rms 速度である。ボース凝縮体のエネルギー（零点エネルギー） $\mu$  は、

$$\mu = \frac{1}{2} \hbar (\omega_x + \omega_y + \omega_z) \quad (\text{E.55})$$

となる。

時刻  $t=0$  でポテンシャルを切った後、拡散するボース凝縮体の密度分布も、またガウシアン型であり、その rms 幅  $\sigma_i(t)$  は、

$$\sigma_i(t) = \sqrt{\sigma_i^2 + \sigma_{v_i}^2 t^2} = \sigma_i \sqrt{1 + \omega_i^2 t^2} \quad (\text{E.56})$$

と表せる。特に、軸対称ポテンシャル  $\omega_x = \omega_y \equiv \omega_\rho$  の場合、密度分布の  $\rho$  方向 ( $x, y$  方向) と  $z$  方向のアスペクト比  $\varepsilon(t) = \sigma_\rho(t) / \sigma_z(t)$  は、

$$\varepsilon(t) = \frac{\sqrt{\hbar/m\omega_\rho} \sqrt{1 + \omega_\rho^2 t^2}}{\sqrt{\hbar/m\omega_z} \sqrt{1 + \omega_z^2 t^2}} = \varepsilon(0) \sqrt{\frac{1 + \omega_\rho^2 t^2}{1 + \omega_z^2 t^2}} \quad (\text{E.57})$$

ただし、

$$\varepsilon(0) = \sqrt{\frac{\omega_z}{\omega_\rho}} \quad (\text{E.58})$$

となる。 $\varepsilon(t)$  の漸近値  $\varepsilon(\infty) \equiv \lim_{t \rightarrow \infty} \varepsilon(t)$  は以下のように初期のアスペクト比の逆数になる：

$$\varepsilon(\infty) = \sqrt{\frac{\omega_\rho}{\omega_z}} = \frac{1}{\varepsilon(0)} . \quad (\text{E.59})$$